

## 14 自閉症青年の個別活動から小集団活動へと発展させたアプローチ

国立秩父学園指導課 日野憲文・齋藤信哉

### 1. [はじめに]

自閉症の人は障害特徴から集団生活に支障をきたしているため、個々に違う個別支援のプログラムが必要ということである。自閉症青年に環境設定を整え、不安・不快を解消しながら支援することで、個別活動から小集団の中での活動ができるようになったので報告する。

### 2. [方法]

(1) **対象者** 24歳、男性、自閉症・知的障害。発達検査＝3歳相当。日常生活動作：歯磨き、洗面、入浴等はカードスケジュールの使用でほぼ自立。

コミュニケーション：＜表出＞1～2語文が殆ど。＜受容＞簡単な声かけ指示には応答し、写真や絵及び短い単語を数語読み取る。行動や習癖：不安傾向が強く、集団の中や苦手な人と会ったりすると不穏になることがある。聴覚過敏があり、寮舎から屋外に出る時等はヘッドフォンを着装している。

(2) **目標** a) 他の利用者と一緒に食事を摂る b) 他の利用者と一緒に入浴をする

#### (3) **援助経過**

a) 聴覚過敏への対応一フロアに音楽をかけ、比較的静かな利用者2名と場所を共有した。

手順①朝の今日の予定作成時に写真カードを使用し、一緒に食べる利用者を知らせた。

②昼食時に食卓前に貼ってある利用者の写真カードで再度知らせた。

③フロアにCDラジカセで音楽をかけた。

b) 浴室前の扉に利用者の写真カードを貼り、一緒に入る利用者を知らせることと、入浴手順をスケジュールに沿って行った。

### 3. [結果]

a) 利用者を写真カードで知らせることとCDラジカセで音楽をかけたことで、拒否的な行動が出ることなく、終始穏やかに食事を摂れた。また、食事後の下膳も可能であった。

b) 入浴の流れと一緒に入る利用者を事前に写真カードで示すことで、他の利用者と共に落ち着いて入浴できるようになった。

### 4. [考察]

食事場面については、まず聴覚過敏性の問題については環境設定を①フロアに音楽をかけるということと②比較的静かな利用者で食事を摂ることの2点で検討することで、穏やかな食事場面を設定することができた。また、両検討場面について写真カードで事前に予告することやスケジュールを使用することで、集団場面が苦手な本事例においても安心して活動できたと考えられる。

個別活動から小集団での活動に移行するためには、対象者の特徴を把握した上で環境設定をして支援を行うことが必要であると示唆された。

現在は集団場面に不安・不快がなく「居る」という成功体験を積み重ねた。今後もより良い環境設定をすることで本事例に負担の少ない支援を行い、日中活動場面（作業場面など）でも更に集団で活動できる場を広げていきたいと考えている。